

詩を読む実践について(その二) †

— 続・「矢沢宰詩集」の授業 —

青柳 宏*

宇都宮大学教育学部*

詩(作品)が、作者のどのような人生から生み出されたのかを知ることによって、詩の解釈を深化させていくことができる。また、ある一つの詩をクラスの他の子はどのように読んだのか、その感想を知ることによって、自分自身の解釈を深化させていくことができる。このような過程を通して、詩が自分にとってどんな意味があるのかがはっきりとしてくる。今回、私は、授業全体がこのような過程となるよう構想し、実践をおこなった。

キーワード：詩、言葉の誠実な使い手、著者研究、学びの履歴

1. はじめに

今回、私は、下野市立祇園小学校において、「詩を読む」授業をさせていただいた。教材としたのは自ら独自に作成した「矢沢宰詩集」である。この「矢沢宰詩集」の授業を、2008年2月13日に第一回目を、そして2月20日に第二回目を(ともに一回45分、計90分)、6年生(男子18名、女子20名)のクラスにおいておこなった。

本稿は、2月20日におこなった第二回目の授業について検討をおこなったものである。第一回目の授業についての省察をふまえ、第二回目の授業は、子どもたちが「矢沢宰詩集」をさらに読み深めていくことをねらいとしておこなった。本稿は、この第二回目の授業の具体的な展開を記した上で省察をおこない、さらに授業中に書かれた子どもの感想を子どもの「学びの履歴」として再構成し、考察をおこなった。

2. 第二回目(2月20日)の授業の展開

第一回目(2月13日)の授業の最後に回収した「矢沢宰詩集」をまず1人1人の子どもに返却する。本日は女子一名が欠席しているため、男子18名、女子19名、計37名の子どもたちとの授業となる。そして、第一回目の授業の省察をふまえ、今回はまず、詩集裏表紙の裏面の矢沢のプロフィールをゆっ

くり読み聞かせることから始める。

「矢沢宰(1944~1966)昭和19年中国江蘇省生まれ。……小学2年のとき腎結核を発病し右腎臓を摘出。13歳で左腎臓も結核発病、絶対安静の生活を送る。一時回復し19歳で高校入学を果たすが、高校2年の冬に腎結核が再発し再入院、昭和41年3月、21歳で永眠。13歳の秋から詩作を始め、死と向き合いながら約500篇の詩を残す。……」

上のプロフィールを読み聞かせながら、同時に「1944年生まれということは、みんなのお祖父さん、お祖母さんと同じくらいの生まれだと思います。」「21歳で永眠、とありますが、「永眠」は永久に眠ると書くので亡くなったということです。」「13歳から詩を書き始めたとあるけど、みんなは今12歳だと思うから、みんなからすれば来年から詩を書き始める感じですね」など語りかけた。

次に、プリント(第一回目の授業で子どもたちが書いた「一番好きな詩」についての感想から17人の感想を選び、プリント化したもの)を配布し、やはりそれを読み聞かせる。それぞれの子どもの感想を読む前に、まず感想の対象になっている詩を読み聞かせ、その直後に子どもの感想を読み聞かせるという形で進める。プリントの内容は以下の通り(一部省略)である。

「さびしい道」について

† Hiroshi AOYAGI*: The Reading the Poetry by the method of the Author's Studies : Part 2

* Faculty of Education, Utsunomiya University

・矢沢さんの「さびしい道」とはどんな道なんだろう？ぼくにとってこの「さびしい道」は「挑戦の道」と感じた。ぼくはとても挑戦してみたい気持ちがある。たとえ1人だとしても挑戦してみたいと思う。

N.K. (男子)

・ぼくには、分からない
なぜだかわからない

わかりそうで、

わからなそうな道 (詩で気持ちをかいてみました。) K.K. (男子)

・矢沢さんは、だれも寄りそうてきてくれないどんな「さびしい道」に行きたかったのだろう。S.Y. (女子)

「武器」について

・自分の短所をおぎなうよりも長所を伸ばす事で、自分の存在の小さな真実を持ち、生きる事が大切だということを表している。O.J. (男子)

「自分だけに」について

・矢沢さんの「自分だけに」って何だろう。自己中心にならないようにしながらも自分の意見を言うことがいいことだと思うっていうことを伝えている気がする。K.M. (女子)

「鮎」について

・矢沢さんは、腎結核で亡くなっていてこの詩は、病気に苦しんでいる自分のことを鮎と考えて書いた詩なんじゃないかなと思った。W.H. (男子)

「あなたの手は」について

・私は冷たくてもあたたかくても、小さな手を見るとにぎりしめたくなり、大きなあたたかい手で自分の手を包みこまれると、安心感があって、ほっとします。あたためるとひよこが生まれる手とはどんな手かにぎってみたいです。C.S. (女子)

・私が一番気に入った詩は「あなたの手は」です。この詩は、たぶん『あなたの手がとても優しい手で、この先何があっても自分の力で頑張る』と言う風に感じました。Y.A. (女子)

「僕から」について

・「どうしてもやりたい大切なものがある」というところが、「さびしい道」とちょっと似てると思っ

た。O.M. (女子)

「少年」について

・この少年は魚をつりたいのに、なぜさばくにいるのか。この少年はサカナをつるためにどのようなばしょでもつるきになっている。I.M. (男子)

以上のプリントの内容の読み聞かせに、子どもたちはよく集中していたと思われる。感想を読み上げ、さらにその感想を書いた子どもの名前を大事に読み上げた。1人1人が感じたことを大切にするという雰囲気をつくりたいという思いを強くもって読み聞かせをおこなった結果、そのような雰囲気のある程度生み出せたと思われる。また、読み聞かせの合間に、それぞれの感想の内容にかかわらせて問いかけをおこなった。例えば、「矢沢さんは……どんな「さびしい道」に行きたかったのだろう」とS.Y.さんは書いてますが、みんなは、どんな道かイメージできますか？」などの問いかけをおこなった。

また、特に、最後のI.M.君の「この少年は魚をつりたいのに、なぜさばくにいるのか」という感想をとりあげ、次のように子どもたち全員に語りかけた。

「先生(青柳)は、I君の感想を読んでほっとさせられました。「なぜさばくにいるのか」という感想を読んで、この詩は矢沢さんの心の世界を表しているのではなかつたと思いました。「光る砂漠」は矢沢さんの心の世界のことを言っているのかと思いました。みんなも、「少年」という詩が、全体として、矢沢さんのどんな心を表しているのか考えてみてください。」

以上のように語りかけた後、「それでは改めて、「少年」を読みますから眼をつぶって聴いてください。どんな矢沢さんの心を表しているか感じ取ってください」と言い、「少年」を二度読み聞かせる。そして、「それじゃあ、眼をあけてください。矢沢さんは、この詩でどんな心表現しているかわかった？わかった人は手をあげてください」と語りかける。しかし、子どもたちが手を挙げるのをそれほど待たず、「もう一回読みますから、また眼をつぶってください」と言い、三度目の読み聞かせを行う。読み聞かせた後、さらに次のように問いかけた。

「二行目の「影を抱いて」というところは、砂におちている自分自身の影を抱く様にしているのかなと先生は思いましたが、みんなはどう思いますか。」

とにかく、「少年」は全体として矢沢さんのどんな心を表しているのでしょうか。それを考えたいと思った人はぜひ考えてください。」

以上の問いかけまでで、授業開始から約21分である。そして改めて、子どもたちに今日の授業の課題について次のように語りかけた。

「今日は、四人グループになって、矢沢さんの詩について、それぞれ感じたことを発表してもらいたいと思います。ただ、グループになる前に、もう一度、改めて、自分の好きな詩についての感想をこれから5分くらいで書いてください。特に、「少年」については色々言いましたが、「少年」のあまり好きでない人は自分の好きな詩について書いてください。」

以上のように、まず個人で改めて好きな詩について感想を書く作業をはじめさせる。同時に、私（青柳）は、今日の授業の「目的」として以下の言葉を板書する。

「誠実に感じたことを書く（話す）。／誠実に相手の言葉を聴き取る。／そして相手の感想についての感想を話す。」

およそ5分後、ほぼ全員の子どもが感想を書き終えたところで、上の板書の内容に注意を促しながら、次のように語りかける。

「今日は、これからグループ（四人）になって、自分の書いた感想をグループの中で発表してください。そして、発表を聴いている他の人たちは黒板に書いたように「誠実に相手の言葉を聴き取る」ということをしてください。さらに今日は、他の人の感想を聴いて、その「感想についての感想を話す」ということをやってもらいたいと思います。そこで、ただ、「自分も同じように感じました」というのはダメです。同じように感じたとしても、何か微妙にちがう部分があるなどと思ったら、こういう部分はちがうなというのを何とか言葉にしてみてください。うまく言えずに沈黙してしまうのは構いません。そういう沈黙は大事だと思います。それでは、机を動かして、グループになって、感想の発表と、感想についての感想を話す、ということをはじめてください。」

上のように語りかけ、この後、各グループでの活動となる。グループでの活動の様子を見ると、一人一人、自分の感想を発表することはできても、他人の感想についての感想を話す段になると、しばしば

口ごもってしまう様子も見受けられた。しかしそれでも、相手の感想と自分の感じ方の似ている点、異なっている点について懸命に話していた。九つの班の内、二つの班の発表の一部を以下に記す。

（A班）

A君：（「さびしい道」について）なぜ、そんなにもさびしい道をいきたがるのだろう、ぼくはそんな道行きたいとは思わない。

Bさん：（Aさんは）わからないって言ったけど、わたしは何となくだけどわかる。

Cさん：わたしはAさんとちがって、行き先がわからなくても行きたい道を歩く。

D君：さびしい道だけど、行きたくないけど、ぼくは少し行きたい気がする。

（B班）

E君：（「少年」について）光るほど暑い砂漠なのに影を抱きながら魚を釣ろうとする気持ちが少し分かる。

Fさん：砂漠の中なのに、魚を釣ろうとする気持ちが分かる、というのがよく分からない。

Gさん：魚を釣ろうとする気持ちはどんな気持ちなんだろう（と思った）。

H君：光る砂漠を（ぼくは、E君とは）ちがう意味に考えて、そこがE君とちがうと思った。

因みに、上のB班の、E君の発表に対するFさんの「砂漠の中なのに、～気持ちが分かる、というのがよく分からない」という発言は、「詩の内容そのものが分からない」という意味での発言ではない。そうではなく、Fさんは、E君の「光るほど暑い砂漠なのに……魚を釣ろうとする気持ちが少し分かる」という理解の仕方の矛盾を指摘しているのである。言い換えれば、この詩は、象徴的に解釈しないと解釈できないのではないかと、ということもFさんはE君に対して語りかけていると言える。その証拠に、次のFさん自身の感想の発表では、Fさんは次のような発表をしている。

「私は、「光る砂漠」と言うのは、私が思うに、心の中の砂漠なんだと思う。「影をだいて少年は魚をつる」と「青い目ふるえる指先」と言うのは影が青い目で指先がふるえていると言うふうに乗った。つまり少年は影のために早く魚をつってあげたいと思える。」

以上のようなグループでの発表をはじめて6分後、授業の残り時間もあと数分となったので、次の

ような指示を出した。

「それでは、感想の感想は後回しにして、まだ自分自身の詩についての感想を発表していない人が発表してください。それから、もう各自の感想の発表が終わったグループは、各自、詩集の最後の真っ白のページに、最後の感想、あるいは矢沢さんに向けた詩でもいいし、詩のような感想でもいいので、書いて下さい。一行でも二行でもいいです。自分の感じたことを書いて下さい。」

以上の指示を出して、約6分後、「最後の感想」をほとんどの子どもたちが書き終わったので、子どもたち全員の「詩集」をやはり今回も回収し、「みんなの感想についての先生（青柳）の感想を書いた上で、みんなに返却します」と語りかけ、授業終了となる。

3. 子どもたちの感想（「二回目の感想」と「最後の感想」）

以上記したように、子どもたちは、新たに矢沢のプロフィールと一度目の授業において他の子が書いた感想を読んだ上で、「二回目の感想」を全員が書き、その感想をグループで発表し、その自分の感想についての他の子どもの感想を聴いた上で、「最後の感想」を書いたわけである。尚、「最後の感想」を書いた子どもは、出席者37名中33名である。感想を書いていない4名については、発表を終えてからの「最後の感想」を書く時間が2～3分のグループもあったため、感想を書くことができなかったと思われる。次にこれらの二つの感想をみてみたい。

3. 1. 二回目の感想

この二回目の感想も、子どもたちは「一番好きな詩（気に入った詩）」について感想を書いている。まず、それぞれの詩を「一番好きな詩」として選んだ人数を以下に示す。尚、()内は前回の授業（一回目の感想）で、その詩を「一番好きな詩」に選んだ人数である。

①さびしい道：5名（9）、②武器：2名（3）、③まよい：2名（1）、④自分だけに：3名（2）、⑤鮒：4名（8）、⑥本当に：2名（4）、⑦あなたの手は：3名（9）、⑧僕から：4名（7）、⑨第一に死が：5名（2）、⑩少年：18名（8）

そして、実際に書かれた子どもたちの「二回目の感想」は次の通りである。（一部省略）

①「さびしい道」について

・矢沢さんの「さびしい道」は、死と向き合いながらも、詩を書いていくという道なんじゃないかなと思った。M.M.（女子）

・なぜ、そんなにもさびしい道をいきたがるのだろう、ぼくはそんな道行きたいとは思わない。W.H.（男子）

・矢沢さんは、たぶん「入院」（死？）という道について腎結核を治したかったのだと思う。S.Y.（女子）

②「武器」について

・自分に合う様に、自分の中にあるものをだせるといいというよう矢沢さんの気持ちが伝わってきた。

H.R.（女子）

③「まよい」について

・自分の中にまよいは入れない、入れさせない！とゆうきもちとともに、矢沢さんのまよいとはなんだろう。I.A.（女子）

④「自分だけに」について

・いやな事などがあつた時は、自分一人だけで何かをしようとしなくて「周りの人達から助け合いながら生きていく」という風に思った。Y.A.（女子）

⑤「鮒」について

・矢沢さんはこの「鮒」と同じ状態なのかもしれない。矢沢さんは「鮒」と同じで世の中においてこうとしているが、腎結核で、動けなくなり自分の夢を空にたてているのかなと思った。A.K.（男子）

⑥「本当に」について

・「本当に」を読んで自分が他の人と話してて、真剣に聞いてくれることを思いだすと、矢沢さんみたいになる時があるかもしれない。矢沢さんは素直に書いたんだな。N.S.（女子）

⑦「あなたの手は」について

・「あたためるとひよこが生まれる手」ということは、あなたの手はたまご、その手をあたためている自分の手はニワトリみたいだと思った。C.S.（女子）

⑧「僕から」について

・矢沢さんは、イエス様と詩を大切にしているのだと思った。自分も大切なものを取ったら灰になってしまうのかなあと思った。S.Y. (男子)

⑨「第一に死が」について

・ぼくは「第一に死が」という詩が好きです。矢沢さんが腎結核になり、死と戦わなければならない気持ちが良いわかります。ぼくは、生まれてすぐに「ずいまくえん」になったけれど、矢沢さんは二十一才の若さで亡くなってしまっかわいそうだと思う。

N.M. (男子)

・矢沢さんは、そこに死があるのに生の真実を探るために一生けん命なのが伝わってくる。I.K. (女子)

⑩「少年」について

・矢沢さんは早く病気を治したいと思っている。

K.M. (女子)

・ぼくはこの詩から、矢沢さんはたとえどんなに重い病気だろうと、たとえどんな場所にしよう詩を書きたいという気持ちが伝わってきて、よくよく考えると、ぼくにとって「さびしい道」と「少年」は何だか似ていると思った。N.K. (男子)

・矢沢さんが永眠する直前に心の中で最後にやりたかったと思った。N.N. (男子)

・『青い目 ふるえる指先 少年は早く 魚をつりたい』という所を読んで、矢沢さんは病気でもしも死んでしまうのなら、その前に自分のやりたい何かをやってしまいたいかなあと思った。H.M. (女子)

・少年の詩の「青い目」という所は、矢沢の悲しい気持ちがこめられていると思った。Y.M. (男子)

・少年という詩は矢沢さんは自分の事を書いたのだと私は思いました。光る砂漠とはこの世界のことで影というのは矢沢さんのわずらっている病気の事じゃないかと思います。そして、矢沢さんにとっての魚は健康のことかなあと思います。矢沢さんははやく健康になりたい！という思いをつめて、書いたのだと思う。N.K. (女子)

・少年は、光る砂漠で、生きるために魚を早くつりたい。S.S. (男子)

3. 2. 最後の感想

そして、「最後の感想」は以下の通りである。(一

部省略)

・矢沢さんの詩は、生と死に関係している詩が多く、自分が今生きている事自体を不思議に感じさせる詩である。O.J. (男子)

・矢沢さんは、病気をもっているのに、死と向きあいながら、詩を書いていけるのがすごいとおもった。矢沢さんは、何で詩をかきはじめたのだろう。S.K. (女子)

・私は、死と戦っている
戦わなければならない
詞に、自分のすべてをぶつけて、
死と戦う

それは、
すごいことでもあるが
大変なことでもある

でも、私は、死と戦う

詞は、命よりも大切だから I.A. (女子)

・矢沢さんの詩は、私から見ると、全部自分にたえて書いているのかなあという風に感じました。

O.R. (女子)

・矢沢さんは、とてもさびしい時を沢山過ごしていたんだなと思いました。(男子)

・矢沢さんは、小学2年の時に腎結核を発病し右腎臓のびょうきをなんかいもつづいてかわいそう。I.R. (男子)

・矢沢さんの詩のほとんどは、生きたいなんとしても生きのびたいという気持ちが表れているとこの詩集を読んで感じた。T.R. (男子)

・矢沢さんが腎結核になってしまった事を知ってまた読んでみたら、矢沢のがんばって生きていこうという気持ちがつたわってきました。O.Y. (女子)

・矢沢さんは、自分の考えたかぎりでは病気についての詩が多いような気がして、矢沢さんの詩のきょ点は腎結核(病気)なんじゃないかなと思った。W.H. (男子)

・矢沢さんは自分の人生を詩にまとめたみたいで詩を読んだ人達に命などを伝えたかったのかもしれないと思った。N.N. (男子)

・矢沢さんの詩に「第一に死が」という詩があるけれど、その詩は実さいにあったことをかいているんだと思う。実さいにあったことをかけるなんてすぐ

いと思った。

矢沢さんへ、もし病気にかからなければ、もっと多くの詩がかけたと思う。天国にいても詩のことを忘れないで下さい。I.M. (男子)

・矢沢さんは残り短い人生を詩をかいて終わってしまつて悲しいと思った。T.T. (男子)

・矢沢さんは、2年生のころ発病だと知らされて自分が亡くなつても思い出が残るために詩を作つた。

S.S. (男子)

・たとえ一人でも

あなたには「詩」というものが

あるではないか

またいつか澄んだ水が流れてくるかも

しれないし、

またいつか本当になつて話をきいてくれる人が

いるかもしれない

だから決してあきらめないで

あきらめたら、そこは「さびしい道」の

行き止まり。S.Y. (女子)

・ぼくは、そうゆうやざわさんにたいしてのかんそうでそうゆう小さなときから病気にたちむかつてそれでもまだしをかいてすごいしゅうねんだなあ〜つて思いました。T.S. (男子)

・ぼくは矢沢さんはなぜこんなに若い年から詩を書き初めたのかとき間に思った。でも詩を読んでいくうちに、自分は重い病気にかかり、この先長く生きられないと思い、死ぬまでに自分の心の中の気持ちを詩に表そうと思ってこんなにたくさんの詩を書いたのだと思った。そしてぼくは「詩」とは考え方がうまいへたというわけではなく自分の心の中の気持ちを誠実に表しているのがいい「詩」といえるのではないかと思えた。矢沢さんは人の心の中を変えられるとてもすごい人なんだと思った。N.K. (男子)

・矢沢さんは、腎結核になつて、つらいけど、自分の生き様を表そうと思って、詩を書いたのかなと思つた。自分の気持ちを率直に書いているものや、わかりにくくなつているものもあるけど、根はみんな同じなのかなと思つたりした。O.M. (女子)

・矢沢さんの詩は自分の事を書いているのが多いんじゃないかなと思つた。自分の気持ちを人にうまく伝える事ができなくて詩にして気持ちをあらわしているのかなと思つた。H.M. (女子)

4. 授業の省察

以上の子どもたちの感想、またさらに先に記した授業の展開をふまえ、今回の授業について省察したい。

授業の展開で記したように、今回は、矢沢のプロフィールを読み聴かせ、さらに一回目の授業で書かれた子どもたちの感想をプリント化したものを読み聞かせた上で、改めて感想を書かせた。また、授業の中で、教師(青柳)の方から、特に「少年」を「矢沢の心の世界の表現として捉えてはどうか」という投げかけをおこなつた。こうした授業における働きかけによって、子どもたちは、第一回目の授業と比べ、より矢沢(作者)の心の世界に向きあうことが出来るようになったと言えるだろう。「少年」を「一番好きな詩」として感想を書いている子はクラスの半数近く(18名)に達し、今回は、ほとんどの感想が「少年」を作者の心の世界を象徴したものとして捉えているのがわかる。また、今回の授業の中で、教師の側から特に何か投げかけたわけではないが、「第一に死が」を選んだ子どもが第一回目に比べ若干増えている。死に向きあつた作者に向きあう、という子どもたち自身の心の変化を表しているのではないか。

また、一回目の授業においては、自分自身の感想を何も書かなかつた N.N.君と S.S.君も、今回は次のような感想を書いている。

N.N.君……(「少年」について) 矢沢さんが永眠する直前に心の中で最後にやりたかつたと思つた。(最後の感想) 矢沢さんは自分の人生を詩にまとめたみたいで詩を読んだ人達に命などを伝えたかつたのかもしれないと思つた。

S.S.君……(「少年」について) 少年は、光る砂漠で、生きるために魚を早くつりたい。(最後の感想) 矢沢さんは、2年生のころ発病だと知らされて自分が亡くなつても思い出が残るために詩をつくつた。

上の二名ともに、「少年」を選び、またそれぞれに作者に向きあつてることがわかる。このような作者に向きあうようになったのは、一つには作者のプロフィールを読み聞かせたことが大きいと思われる。しかし、ここで再度、プロフィールを読み聞かせたことの意味について考えてみたい。

プロフィールを読み聞かせたことで、子どもたちは、作者の人生そのもの(重い病気を病んでしたこと)について強く関心をもつたと思われる。それは、多くの子どもたちの様々な感想からみてとれる。し

かし、こうした作者の人生そのものへの関心が、詩の解釈を疎外していると考えられる点もある。例えば、S.Y.さんは、「さびしい道」について「矢沢さんは、たぶん「入院」という道にいて腎結核を治したかったのだと思う。」と書いている。この感想は、例えば「さびしい道」を「死と向き合いながらも、詩を書いていくという道」として捉えているM.M.さんの感想に比べると、プロフィールから詩を解釈している傾向がより強い。言い換えれば、S.Y.さんの解釈は、詩の言葉そのものを読むことよりも、詩の言葉を「病氣」という作者のプロフィールによって意味づけてしまっている傾向が強い。こうした傾向は、S.Y.さんだけでなく、他の数人の子どもたちの感想にも読み取ることができる。しかし、だからといって、プロフィールを読み聞かせなかった方がよかったということではない。明らかに、子どもたちは、プロフィールの読み聞かせによって、前回以上に、矢沢の人生と矢沢の詩について強い関心をもつようになった。それゆえ、プロフィールをふまえながらも、同時に子どもたちが詩の言葉そのものを読むための援助がさらに必要であったと思われる。

プロフィールのような情報を読めば、「作者は重い病気を病んでいた。だから……と書いたのではないか」というような因果的な思考が働きやすい。このような思考を崩すためには、「だから」ではなく、例えば「にもかかわらず」という思考を促すような問いかけをあえてしてもよいだろう。即ち「重い病気をすでに病んでいるのに、にもかかわらず、なぜさらに作者は「さびしい道」にいきたかったのだろう？」というような問いかけである。プロフィール（実人生についての情報）と詩の言葉の関係性は単純な因果関係にはならないことを教師がふまえるならば、意味のある指導・援助が可能ではないだろうか。例えば、「少年」という詩は、21歳で亡くなった矢沢が20歳の時に書いたものである。それゆえ、授業において、「20歳の、しかも死に向き合わざるを得ない「青年」が、なぜ「少年」という詩を書いたのだろうか？」という問いかけることで、「少年」の詩の解釈が深まっていく可能性がある。この意味で、プロフィールのような情報と詩の言葉そのもの関係性を問うことには意味があるだろう。また、このように作者にかかわる多様な情報と作品（詩）の言葉そのもの関係性を問うていくことが、

詩の授業の一つの領域としての「著者研究」の具体的な方法論になると言えるのではないか。

ところで、今回の授業を終えた後、小学校の先生方が、私の授業についての検討会を開いてくださった。その検討会において、授業における教師（私）の子どもたちへの問いかけの言葉について問題が指摘された。それは、（先の「授業の展開」にあるように）特に教師が、子どもたちに目をつぶらせた上で「少年」の詩の読み聞かせをした直後におこなった次の問いかけについてである。

「それじゃあ、眼をあけてください。矢沢さんは、この詩でどんな心を表現しているかわかった？ わかった人は手をあげてください。」

授業を参観していたある先生によれば、眼をつぶって読み聴かせを受けていた子どもたちは、明らかに「感じていた」にもかかわらず、教師の「この詩でどんな心を表現しているかわかった？」という問いかけに、多くの子どもが「顔をこぼらせた」という。もし、その時、教師が「わかった？」という問いかけではなく、「（それぞれ）どんなことを感じた？」と問いかけたならば、子どもたちは感じていたことを表現しようとするのが出来たのではないかということである。まさにこの指摘の通り、教師の「この詩でどんな心を表現しているかわかった？」という問いかけは、子どもがそれぞれに「感じていた」ことを表現する意欲をうばってしまったのだと思われる。「わかった？」という問いかけは、「正解」を求める問いかけである。詩の授業においては、読み（解釈）を深めていくために、まず一人一人が何を感じたか、またそれを表現していくことを大切にしなければならない。子どもたちの表情のこぼりを見とった先生の指摘は、詩の授業がどうあるべきか、その本質を語っていると思われる。

5. 学びの履歴

最後に、第一回目の授業と、その一週間後におこなった今回の第二回目の授業を通して、一人一人の学びがどのように進展していったのか（あるいはしなかったのか）をみてみたい。まず I.A.さんという一人の女子の、第一回目、第二回目を通しての「学びの履歴」を検討したい。

まずは、I.A.さんが授業第一回目に書いた「一回目の感想」、そして授業第二回目に書いた「二回目の感想」と「最後の感想」を以下、順番に示す。尚、I.A.

さんは、一回目の感想では「一番好きな詩」として「僕から」を、二回目の感想では「まよい」と、そしてやはり「僕から」を選んでいる。

(一回目の感想：「僕から」について)

「私も、そうゆう気持ち分かります。私だったら、『イエス様』の所が『友達』、『詩』の所は、『家ぞく』です。私も、1番大切なものを取りあげられたら、灰になる、と思います。」

(二回目の感想：「まよい」について)

「自分の中にまよいは入れない、入れさせない！とゆうきもちとともに、矢沢さんのまよいとはなんだろう。」

(二回目の感想：「僕から」について)

「イエス様を信じる人たちから、イエス様をとりあげる。つまり、神さまをとりあげる。矢沢さんから、詩をとりあげる、つまり、矢沢さんから、神さまをとりあげる。とゆうことになると思う。1番大切なものをとりあげるとゆうのはかみさまがいなくなるのと同じだと思う。」

(最後の感想)

「私は、死と戦っている
戦わなければならない
詞に、自分のすべてをぶつけて、
死と戦う

それは、
すごいことでもあるが
大変なことでもある

でも、私は、死と戦う
詞は、命よりも大切だから」

以上の I.A.さんの四つの感想（「最後の感想」は詩として書かれている）を順番にみれば、そこに I.A.さんの「学びの履歴」を読み取ることができるのではないか。「一回目の感想」では、矢沢の「僕から」について、「私だったら『イエス様』の所が『友達』、『詩』の所は、『家ぞく』です」と、I.A.さん自身の感情をそのまま感想として書いている。しかし、「二回目の感想」では、まず「まよい」について、「まよいは入れない、入れさせない！とゆうきもちとともに、矢沢さんのまよいとはなんだろう」と問いかけている。即ち、「まよい」については、I.A.さんは、もはや自分の感情に引きつけて理解することは出来ないと感じ、それ程に強く「いれさせな

い」という気持ち、またそもそも「矢沢さんのまよいとは何だろう」と問いかけている。ここで、私たちも、矢沢の「まよい」とは何か、自分自身に問いかけてみたい。矢沢にとっての「まよい」とは何だったのか。「まよい」とは、詩を書くことに命をかけようとしても、何か他の欲望（願い）に誘われてしまうことか。あるいは、生きて詩を書くよりも、自ら生を捨ててしまいたいと時として考えてしまうことがあったのか。それを「まよい」と言っているのか。このように、私たちも、自分自身に、矢沢の「まよい」とは何だったのかと問いかけてみれば、容易にそれを想像できないことがわかるだろう。それゆえ、I.A.さんも、ただここでは問いかけることしかしていないのだと思われる。

ところでまた、「二回目の感想」では、I.A.さんは、一回目の時にも選んだ「僕から」についても感想を書いている。そして、そこでは、一回目の感想とは異なり、自分自身の感情に引きつけるのではなく、あくまで、矢沢にとって、「詩をとりあげる」とはどういうことなのかについてじっくりと考えている。そして、「最後の感想」として書かれた詩における「私」は、I.A.さん自身ではなく、矢沢に同化した（同化しようとしている）I.A.さんとしての「私」である。そして、最後の連の「でも、私は、死と戦う／詞は、命よりも大切だから」を読むと、先の I.A.さん自身の「まよい」についての問いかけに対して、この詩そのものが応えていることが分かる。矢沢は、死と戦っている。しかし、それはただ生命の存続を求めているのではなく、詩を書くことを求めているからであり、その意味で、命よりも詩を求めている。だから、I.A.さんは、矢沢の「まよい」を、命を超えて詩を求めながらも、命に執着せざるを得ない「まよい」としてとらえたのではないだろうか。このような推測が正しいかどうかは別に、I.A.さんの感想を順番にみれば、そこに I.A.さんの「学びの履歴」を認めることができるだろう。

I.A.さん以外の他の子どもについても、それぞれの学びの履歴を認めることが出来る。第一回目の感想では、「さびしい道」を「好きな詩」に選んだ子どもが比較的多い（10名）。そして、何人かの子どもたちは、そこで「矢沢さんにとっての「さびしい道」とはどんな道なのか」という問いをもち、それに対する自分なりの答えを第二回目の授業で模索しながら、一方で、「少年」が表現していることは

何かを考えている。そのような子の中には、例えば、「さびしい道」は「死と向き合いながらも、詩を書き進んでいくという道」としながらも、「少年」の「早く魚がつかいたい」というのは「早く腎結核から回復したい」ということを表現していると捉えている子（M.M.さん）がいる。一方で、他の子（N.K.君）は、「たとえどんなに重い病気だろうと、たとえどんな場所にいようと詩を書きたいという気持ちが伝わってきて、よくよく考えると、「さびしい道」と「少年」は何だか似ている」と捉えている。おそらく、矢沢には詩と生命を共に求めながら、詩を求める心がより強くなる時、あるいは生命を求める心がより強くなる時があったのではないか。そして、そのような矢沢の心のあり様が、子どもたちのそれぞれの「学びの履歴」に反映していると捉えることができるのではないか。

また、子どもたちの中には、矢沢の詩を読むことを通して、自分の思いを誠実に表現するということがそのものに感動している子もいる。例えば、一回目の感想で、「この少年は魚をつりたいのに、なぜさばくにいるのか。この少年はサカナをつるためにどのようなばしょでもつるきになっている。」と書いたI.M.君は、「二度目の感想」、そして「最後の感想」ではそれぞれ次のように書いている。

（二度目の感想：「少年」について）

「この少年の「ふるえる指先」から、この少年は魚をにぎりたくてたまらないという気持ちが伝わってきた。」

（最後の感想）

「矢沢さんの詩に「第一に死が」という詩があるけれど、その詩は実さいにあったことをかいているんだと思う。実さいにあったことをかけるなんてすごいと思った。／矢沢さんへ、もし病気にかからなければ、もっと多くの詩がかけたと思う。天国にいても詩のことを忘れないでください。」

上のように、I.M.君は、二度目の感想で、「第一に死が」について「その詩は実さいにあったことをかいているんだと思う。実さいにあったことをかけるなんてすごい」と書いている。このI.M.君の感想と共に、ぜひ、矢沢の「第一に死が」を再度読んで頂きたい。そこには、まさに、矢沢のぎりぎりの生き様が端的に書かれている。「第一に、そこに死があり、死と戦わなければならなかった。そこには死と自分だけしかなかった。そこから個人的な真実、

祈りが生まれ、それが詩となって表された。……」

おそらく、I.M.君の「実さいにあったことをかけるなんてすごい」という理解は、死が目前にある現実を直視し、その自分の現実を書くことが自分の生きる道であるとした矢沢の生き様に対する感動であろう。言い換えれば、自分自身の現実を誠実に言葉化することに対する感動であろう。だから、「天国にいても詩のことを忘れないでください」というI.M.君の言葉は、天国にいても、「現実を誠実に言葉化することを忘れないでください」という意味ではないだろうか。

ところでまた、W.H.君は、二度目の感想においても、「なぜ、そんなにさびしい道をいきたがるのだろう、ぼくはそんな道行きたいとは思わない」と書き、最後の感想では「矢沢さんは、自分の考えたかぎりでは病気についての詩が多いような気がして、矢沢さんの詩のきょ点は腎結核（病気）なんじゃないかなと思った」と書いている。二回の授業を通して、W.H.君は、矢沢が病気に苦しむ中で見いだした詩を書くことの意味を理解することが出来なかったと言えるだろう。W.H.君にとっては、詩の言葉が、「病気」という「きょ点」からのみ理解されていたのではないだろうか。こうしたW.H.君の学びの履歴をみると、今回の授業においては、他者の感想と交流することで自分自身の感想を再構築していくことが充分には出来なかったが見えてくる。この問題を乗り越えていく授業が求められていると言えるだろう。

因みに、第二回目の授業の後、第二回目の授業の中で書かれた子どもたち全員の感想をプリント化して配布した。また、子どもたちの感想に対する私（青柳）の感想を、一人一人の「矢沢幸詩集」の最後の頁に書き込み、全員に返却した。例えば上のW.H.君に対しては、私は次のように感想を書いた。

「W君へ W君のす直な感想がいいなと思いました。たしかに、だれも好きこのんでさびしい道を行こうとは思いませんね。でも、なぜ、その道を矢沢さんはいこうとしたと思いますか？ぜひ、考えてみてください！ 青柳」

以上のような一人一人の「学びの履歴」に即した私自身の感想と、プリント化したクラス全員の多様な感想を読むことを通して、W君だけでなく、一人一人の子どもが、自分自身の感想をさらに再構築していくよう求めたわけである。

6. おわりに

この授業の目的は、「その一」で述べたように、矢沢の詩を読むことを通して「誠実な言葉の使い手（聴き手）」を育てることである。また、そのための方法は、（端的に言えば）複数の矢沢の詩とプロフィールを読み、矢沢の人生を想像し、そのような人生から言葉（詩）が発せられていることを実感する、ということである。この実感がどこまで得られ、どこまで自らも誠実に言葉を使おうと思うことができたかは、（子どもたちの感想を見ればわかるように）一人一人の子どもによって異なっている。しかし、第一回目の授業に比べて、第二回目の授業では、この実感を、全ての子どもがそれぞれに深められたと言えるのではないか。

授業全体を振り返って、特に欠けていたと思うのは、「話し合い」の時間である。もし、時間の余裕があれば、例えば、「矢沢さんはなぜ、「さびしい道」に行きたいと思ったのか？」等をテーマにして、グループで、またクラス全体で話し合いをおこなったかと思う。ヘアード（フレイレ）（Heard, 1989:133）が述べていたように、詩を読むことの一つの大きな意味が、作品と作者の人生の関係（つながり）を読むことにあるとすれば、ある意味では、その人生の意味を問うことなしに詩の理解は得られないはずである。このような問いと話し合いを組織していくことが今回の私の授業に欠けていた点である。

参考文献

Heard, Georgia(1989) For the Good of the Earth and Sun: teaching poetry.Heinemann.

矢沢幸（1969）光る砂漠、童心社

矢沢幸(2007) 光る砂漠・矢沢幸詩集：生命の詩、ほおずき書籍

* 今回の実践研究では、下野市立祇園小学校の辻猛司校長先生をはじめ諸先生方に様々なご配慮、ご協力、またご指導をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

また、大場志津子先生（小山市教育委員会指導主事）には教材の作成及び授業の展開等について数々の貴重なアドバイスをいただいたこと、心より感謝申し上げます。

さらにまた、塩田裕子先生（都賀町立赤津小学校教諭・宇都宮大学教育学研究科・現職派遣大学院生）には、授業をビデオで記録していただく等、様々な協力、援助をいただきましたこと心より感謝申し上げます。